
いやよいやよもすきのうち

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いやよいやよもすきのつち

【年代】

201935

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

正直者の男性と屈折者の女性がコンビを組み、反発しあいながら仕事に励んでいく物語

（前書き）

登場人物

浦澤雅人・うらさわまさと（24歳、信念で必ず人は分かり合えると思う正直者）

天崎侑子・あまさきゆうこ（24歳、物事は近道で効率よくが信条の屈折者）

若桑大五郎・わかくわだいごくろう（50歳、営業部部長）

成枝朝芽・なりえだあさか（44歳、営業部係長）

土場勝人・つちばかつと（42歳、営業部の先輩）

「はい。では、今夜お待ちしています。失礼いたします」
携帯を切り、勇みよく会社の自動ドアをくぐる。

この春、入社3年目。新鮮さは失わず、まだ表情に希望は保たれている。弾むような足取り、流れるような言葉。何にでもひたむきに駆ける姿は現代人には見習うべきものといえよう。

「すいません。乗ります」
張り上がった通りのいい声に、閉まりはじめていたエレベーターの扉が開く。そこに飛び込むと、「すいません、すいません」と数人はいる室内の1人1人に伝えていく。
応えてくれる人間はいない。彼にはそれは大した問題ではない。エレベーターを降りると、受付の女性。他の社員なら素通りかっこりとする程度しか対応しないところを、彼は「戻りましたあ」と営業先の相手にするのと同じ度量で対応する。
そう。この男、とにかく真つすぐなのだ。

「浦澤、ただいま戻りましたあ」
クリーンオフィスの自動ドアをくぐると、営業部どころか社内に響き渡るんじゃない

かぐらいの快活な声を発する。さすがに3年目にもなると他の社員も慣れてきて、適当な返事をするに留まっている。

「係長、先方の田代様にお話を聞いていただけることになりますた」

「あら、よかつたじやない」

「はい。今夜お食事をさせてもらひつゝことになりますして、その席でこちらの話を聞いて

もらいます」

「うん。抜かりなくね」

「はいっ」

頭を下げる、デスクへと戻る。

「いやあ、土場さんに紹介してもらつたチョコバナナケーキ、大好評でしたよ」

「そうだろ。先方、甘いもの好きって言つてたからな。あのケーキでおちない甘党はいないつてもんよ」

左隣のデスクで自慢げに鼻を高くするこの男、土場勝人。入社当初からコンビを組み、

営業のノウハウを教えてもらつた。42歳独身、頭髪の衰退と結婚に危機感を感じる今

田代のところ。

「さすがです。だてに長く現場にいないですね」

「お前、それ嫌味だろ」

ちなみに、いまだに平社員。

「言つとくけどな、上が詰まつてゐるから俺はいつまでもこいつるだけだぞ。そうじ

やなけりや、今頃は出世街道まつしげりよ」

「その話、何十回も聞いてます」

爽やかでハキハキとした返事。本人に何の嫌味もないことが逆に

土場の安定感を損なわせる。

彼が働く会社、クリーンオフィス。都内のビルの2フロアに社をかまえ、まあそこそこに粹はいいと言える。クリーンオフィスの仕事は主に営業。営業部門に自信のない会社、新規の開拓に営業人員を用意できない会社、またはクリーンオフィスの持つ営業のパイプにあやかりたい会社から依頼を受け、営業活動を行つのが役目。全権を任せられることもあれば、依頼主の企業の戦力として参加することもある。つまり、他社の営業の代行を務めるスペシャリストというわけである。当然、そこにいるべき社員は限られてくる。人当たりの良さで信頼を勝ち取る人間。そして、戦略で相手を崩す人間だ。

その時、香り高い甘さとともに人影が過ぎていく。好みは一分されるだらづぐらいの香りの強さは彼女の特徴だ。

「天崎、戻りました」

言い置く程度の言葉。淡白な表面。彼とは対になりえる天崎侑子、入社3年目。

「係長、タワーエルとの契約、無事に終了しました」
「そう、よくやったわね」
「いえ、先方がとても乗り気だったのなんとか出来ました」「そんなことないわ。次も期待してるわよ」「はい、ありがとうございます」
頭を下げる。天崎は彼の向かいのデスクへ戻る。
「侑子ちゃん、今日も良い匂いだねえ。これはバラかな」「ラベンダーです」

「そうそう、ラベンダー、ラベンダー」

強めの香水にいつも反応する土場とそんな反応はどうでもいい天崎の毎日のやりとり。

若い女性に興味ありありの男と先の薄い男性に興味なしの女。少しでも交流を持とうと

する男と少しでも交わそつとする女。

「しかし、侑子ちゃんは凄いねえ。その年でそんだけ仕事できちゃうなんて男顔負けだよ」

「たまたまです」

「いやいや、実力でしょ。ホント、こいつに見習わせたいよ」

「頑張りますよ、俺だつて」

必死にアピールする。それは正しい。確かに我ながらとても一生懸命だ。ただ、彼女

と同期入社ということは彼にとつて不運なことかもしれない。

天崎は社内でもトップを争うほどの契約数をとつてくる。入社3年目、しかも女性とは到底思えない実績だ。彼女とコンビを組んでいる先輩社員の伝谷

は出来すぎる後輩に

すでに根をあげている状態になつてている。媚びないスタイルのため、先輩たちからは多

少の陰口をたたかれている。本人もそれを知っているが、成績の劣る年上社員の僻みだと認識している。

そうしてゐる間に、部長の若桑が会議から戻ってきた。土場とは違ひ、内面も外見も兼ね備えた上司である。

「浦澤、天崎、ちょっと来てくれ」

若桑に呼ばれ、窓際の部長のデスクへと集まる。

「実はな、成枝くんと話しあつたんだが。お前らも3年目になる

わけだから、そろそ

ろ先輩の背中は卒業させようといつことになつた」

卒業、まさか一人立ち。

「いやいや、僕なんかまだまだですよ。土場さんがいてくれないと困ります」

謙遜ではなく言つた。正直、まだまだ自分がそんな位置にいるとは思えない。

「そろは言つてもだな、新しいステップに進むことは必要だ」

言つてることは分かるけど、そんな自信はない。

「経験を積むことは大事なことだ。それでもまた一つ大きくなれるんだぞ」

そこまで言われると・・・・拒みきれなくなつてくる。

「いいな、浦澤」

「はい」

そう言わざるをえなかつた。まあ、認めてくれてるわけだから悪いことではない。

「天崎もいいか」

「はい」

冷静に天崎は言つ。相当の自信だ。

「じゃあ、さつそく今日から2人でコンビを組んでくれ」

その言葉に、彼も天崎も止まつた。

「2人で、ですか」

間があつてから天崎が言つた。

「ああ、2人でだ」

疑問が答えに結びつき、顔を見合わせる。一人立ち以上のまさかの展開だった。

「天崎の契約が終わつたんだつたな。じゃあ、浦澤の進行してて契約をやつてくれ」

よしつ、と若桑は手を2回叩く。背中を押し出すよつこ。理解がしきれないままにデスクへ戻ると、すぐに土場が寄つてき

た。

「いいなあ、お前。侑子ちゃんとコンビ組めるなんて」

「いやいや、同期とコンビってアリですか」

「いいじやねえか、触発し合えて。まつ、お前の場合はもう大差つけられてるから関係ないだろうけど」

ムツとすると、その分だけ土場に笑われた。

「浦澤くん、ミーティング」

会話を遮り、天崎が割ってきた。それだけを言い残し、さつさと歩き出していく。

「あつ、ハイ」

置いてかれないように着いていくと、天崎は社員用の休憩スペースにあるテーブルを

選択した。クリーンオフィスには会議室や応接室もあるが、新米のミーティング程度では使用を自粛するのは暗黙の了解だ。なので、軽い用事はここで済ませてしまう。もち

ろん、軽食や飲み物やタバコで小休憩をする同僚の無駄話が飛び交う中で進めなければならぬ。

「そつちの契約、どういう状況か教えて」

イスに座るなり天崎はメモ帳を取り出す。こういつ時、普通ならコンビを組む事になつた感想でも出てくるものじゃないだろうか。それがいきなり仕事の打ち合わせとは大層なものだ。

契約の進行状況を説明していくと、天崎は淡々とそれを聞きながらメモをとつていく。

彼女から質問されたのは契約の内容よりも先方の人間性についてがほとんどだったのが

疑問に思った。

「そり。じゃあ、今日の接待、私も着いてくわ」

そう言い残し、天崎は席を立つ。

「関係書類、私の分コピーしといて」

言い捨てるようにして、天崎はその場を後にしていく。仕事の出来の人間の印象も受けたが、あつさりとしそぎて腑に落ちない部分もあった。

その日の夜、天崎とともに居酒屋を訪れた。居酒屋といつても大衆のものではなく個室ごとに区切られている店だ。彼にすればワンランク上の店のつもりだつたが、天崎は疑問が拭いきれなかつたらしい。

「どうして、先方との食事が居酒屋なのよ」

「先方がフランクに話せるところがいひつて言つてたからだよ」

「フランクの意味、間違えてない」

不満そうに天崎が呟く。それにイラッとする。自分にひとつは高めの設定にある店を用意したのに、こんな言われようはないだろ？

「いつもこりういうところで飲んでるの」

「いえ、もっぱらチーン店ですけど」

「ふうん」

鼻につく返事をされ、またイラッときてしまつ。成績がいい分、鼻の長さまで立派になつてているようだ。

「そういうそちらさんは」

「私はバーでしか飲まないから」

バー、つて。また鼻につく感じだ。ただ、バーで飲む姿を想像す

るとしつくりきてし
まうのが悔しい。

その時、部屋の扉が開き、先方が部屋へと入ってきた。思考は一
気に切り替わり、姿
勢がピンとなる。

「お待ちしていました、どうぞ」

そう笑顔で促すと、横から抜けていく気配がした。天崎だつた。

「お掛けいたします」

天崎はそう先方の着ていたコートを受け取り、壁にあつた掛けど
ころに備えていく。

その動作はとても手慣れていて自然だった。完全に出遅れた気がし
た。

「こちらと先方の2名で乾杯をすると、会話は何でもない世間話か
ら入つていいく。正直、

そんな話をするためにここに来てるわけじゃないのはどちらも分か
つていて。単なる形

式だ。どこの誰が始めたのかは分からない、接待での会話の流れと
いうものを着実に踏
んでいく。ここでは天崎はあまり目立つてこなかつた。その分、こ
こぞとばかりに話を
弾ませていく。

一通りに盛り上げると、仕事の話へとシフトしていく。あえて流
れは変えない。相手
の気が乗っている時にやつする「どこの誰」の案も良い気のままに
取り込んでもらえる
ように。その進行に相手方も悪い印象は見せなかつた。ここに来て
もらえてる時点で、
相手もある程度は乗り気であるわけだし。

仕事の話を最後まで終えると、その後も軽い世間話をした。結局、
最後まで天崎は前

に出てこなかつた。世間話や彼の説明に補足を加えるべつに。社内トップクラスの成績や「さつきまでの調子はどうしたんだ」と思いたくなるほど、彼のサポート役のように終始していた。

帰り際に、天崎は最初と同じようにして先方のパートを背中に掛けしていく。見送りを終えると、隣からフツと氣の抜けたため息が聞こえた。

「終わつた、終わつた」

さつきまでとは別人のように面に捨てる、しつちはお構いなしにどんどん歩き出していく。着いて行くと、面倒くわそつた表情を向けられた。

「何か用」

「何か用、つて。別にそういうわけじや」

「もう仕事じやないでしょ、いー」

数分前までの様はどこにいたんだつてくらいに煙たげにされる。

「そりやそりやだけど。さつきの接待どうだったとかあるじやん。どうせ、駅まで一緒

なわけだし

そう言つと、仕方なしにつて感じで歩を緩めてくれた。

「何、反省会とか勘弁だけ」

「そんなんじやなく。ちよつと聞きたいこともあつたし

「何よ

「さつき、接待の時にどうして一步引いてたのかなつて思つて。全体的に僕に任せてた感じだつたし」

「ああ、と天崎は咳く。

「あなたのためじやないわよ。基本、女に主導権握られると男はプライドが傷つくな。先方にそう思わせないために引いてたのよ

そういうことだったのか。そこまで考えてたとは。

「なるほどね。てっきり、僕の進めた契約だったからサポートに回ってくれてるの

かと思つてた」

「それもあるけど。それもあなたのためじゃなく、先方があなたから話されるのがいいんじやないかと思つたまでよ。まあ、あなたのプライドがどうなろうが知つたことじやないし」

「いちいちムカつくな。わざとだら、絶対。伝谷さんが嫌になつたのも分かるな。

翌日、先方からの電話があつた。いくつか修正してほしい点を挙げられたが、根本的な部分での否定はなくてよかつた。きちんと誠実に対応していけば、きっと契約してもらえるだろう。

「こんな言つてきたの、向こう

昨日と同じく小休憩スペースでミーティングを始めると、天崎の第一声がそれだった。

「しようがないだろ。先方には先方の思惑があるんだから」

「だからつて、これは言いすぎでしょ。まさか、これ全部受けるつもりじやないでしょうね」

当然のように言われる。ある程度は先方の思惑に応えたいタイプの自分としては少し怯む。

「もちろん。先方とも折り合いをつけていくけど

当然のように返した。本当に茫然とまでは思っていなかつたけれど。

「どうあるつもつ」

天崎はこっちを窺つよつて言つた。なんだか、力量を試されるようで緊張してくる。

どう言えばいいんだ、この場合。いや、いつも通りでいいだらう。

なにも変える必要な

んてない。というより、天崎に緊張してゐる方がおかしい。

「7割ぐらいのめればいいかなつて思うけど」

理想は5割といきたいけれど、こちから側が折れたといふのも見せたからそのぐらいが

いいだらう。こっちの誠意も伝わるはずだ。

「はあつ。7割つて嘘でしょ」

田の前の天崎は信じられないよつて言つた。こつては一体何を言つてるんだ、つてふうに。

「そのぐらいでいいだら。こっちの誠意も見せたいし」

「何が誠意なのよ」

「向こうの提示の半分以上を受け入れたつていうふつて見せたいんだ」

「意味分かんない。そんなの、1割でも誠意よ」

「1割、つて。そりやないだろ。

「それのどこが誠意だよ」

「向こうの提示の少しでものめばいいのよ。それで誠意じゃない

「違う。そんなの先方が不快に思うかもしれないだろ」

「思わせないわよ。つていうか、あんたそんなやり方でやつてきたの」

あんた、つてオイ。それはいくら成績優秀だからつて言はずぎじやないのか。いかん

いかん、ここのでキレてたら子供と同じだ。

「ああ、これでやつてきたよ。何が悪い」

「信じらんない。誰か注意する人いなかつたの。あつ、土場さんだからか」

「オイ。こつちよよくても土場さんまで出すなよ。

「俺はこれでいいんだ。大体、そつちこわそんなり方でよくやつてこれたな」

「ええ、やつてきたわよ。よつ損失のない方法で結果を出してきたの。文句があるならどうぞ」

挑発的な態度に沸点に達しそうになつたけどこりやるしかなかつた。怒つてもどうも

ならないだろ、天崎が結果を残してゐるのも事実だつたから。

「どうやつて1割で成り立たせるつていうんだ。先方が納得しなきや意味ないだろ」

「じゃあ、私がやるから任せてもらえる」

「嫌だ」

それは無理だ。ここまで自分が進めてきた契約なんだから、ここで何かごっちゃごちゃさせるわけにはいかない。

「何でよ。私がやつた方が良くなるんだから任せなこよ」

「そんな保障がどこにある。後どうこうなつてからじや遅いんだ」

「あのね、保障とか言い出したらキリがないじゃない。そんな安全に寄り添おうとしてるから、そういう考え方しか浮かばないのよ」

「大きなお世話だ」

だんだんヒートアップしていくのを抑えられなかつた。休憩をとつていた社員たちの

視線を集めながら、お互にの自論をぶつけ合つと一時的な停戦に入る。もう引き下がれ

はしなかつた。こんなに自分側の利益ばかりを追求したやり方でやらせるなんて許されない。

「悪いけど、今回は僕のやり方でやらせてもらひ。僕が進めてた契約なんだからいいだろ」

「あつ、そう」

強引に綱を引っ張ると、向こうは簡単に手放した。諦めたのか馬鹿馬鹿しくなったのか。どちらにしろ、天崎にやらせると危険なこともなりかねない。というより、これから本当にコンビ組まなきやならないのかよ。こんなのは続けてたら身がもたない、先が思いやられるな。

それからは案を練り直し、先方の希望の半分を受け入れるということに落ち着いた。自分の願望としては7割だつたけれど、一応これからパートナーということもあるから天崎の言い分も考慮したつもりだ。まあ、通常のやり方でやりとすると大体は若桑や成枝や土場に修正するようだ言わてしまつんだけど。

その案を携え、天崎と先方の会社を訪れた。先方の会社はウチヨリも立派なビルの3フロアに社をかまえている。大きさや階数だけでなく見晴らしさや清潔感などからもそれは見てとれる。

「何をソワソワしてんのよ」

右隣の天崎に言われ、自分がそうして「こと」に気づいた。緊張すると体のいろんな場所を触つたり、何度も息をついたりしてしまつのは癖だった。自分では沁みついていることなので普通に近いことと思つていて、初めて田にする人は多少変に映るのだ。

「してないよ」

「してるでしょ。気になるからやめよ」

嫌そうにされる。いつもしては緊張すると出てしまつものなので諦めてもらいたい。

じゃあ緊張するなど言われても、それはそれで難しい。それに、ある程度の緊張感なら持つていいものだと思うし。

「気にしなければいいだろ」

「はつ。まさか開き直り」

言つてろ、言つてろ。今は君にあれこれ感情を向けている暇はない。

「言つとくけど、今『ご』る気にしたつてしまつがないのよ。なるようにならねーんだから」

「分かつてるよ、そんなことは」

「まつ、別に関係ないけど」

なんだよ、それ。せつかく良い言葉をかけてくれたのかと思つたのに。やっぱ、どう

にも合ひやうにならないな。

その時、先方が応接室へと入つてきた。自分や天崎への感情は遮断し、今ここに集中

を向ける。先方は先日の食事での接待の時の2人だった。

軽い挨拶程度の会話を終えると、本題へと入つていく。先方の提

示してきた案へのこ

ちら側の返答。天崎の無茶な案を折り、押し通した僕の案を説明していく。先方は表情こそ至まなかつたが、前向きに捉えてくれてるのはまづ見えなかつた。

実際に先方の返答は渋りを含めたものだつた。そこをなんとか、とこちらも引き下がらずには粘る。交渉は粘りと折り合いだ。粘れるものは粘つて、ダメなようなら折り合いをつけることも大事になる。天崎も同じようにしていた。自分の使つていらない言葉や向けていない方向から説明を足し、踏みこみすぎないとこひるで適度に止まつていて。

結局、両者の思惑は平行線に終わつた。まだまだ交渉の初期段階なので、そこまで結果を求めていなかつたので「のべりことこりことひるだひる。今日の時点ではこれで満足といえる。

最後にまた挨拶程度の会話を加え、帰るひつと立ち上るとカランゴロンとう音が部屋に小さく鳴つた。天崎がペンを落としたようだ、相手方の方へ転がつていつたのをすぐ拾つて「失礼しました」と微笑んでいた。別段何といふふつとも思わず、部屋を後にしていく。

「あれ、なんとかならないのかしら」

先方の会社を出ると、天崎がため息まじりに発した。自分へ言われているのか、先方へ言つているのかに迷う。とりあえず、促さずに次の言葉を待つ。

「だらだら話すの。早く始めればいいのとにかく終わらせればいい

のにとかイライラし
ちやうのよね

いまいち掴めなかつた。僕が分からないとこひつじてみると、

天崎は「最初と最後

の方のやつよ」と付け足す。それで把握することができた。先方との話し合いの中での

始まりと終わりにした挨拶程度の世間話のことを見つけていたんだろ

う。といっても、案

についても触れてるからただの世間話といつわけじゃない。それに、

相手との間合いを

縮めるためにも必要なものだ。

「あれはあれで必要なんだよ」

「分かってるわよ。だから、別に止めたりしないじゃない。けど、
もつと簡潔にやれ

ないもんのかしらって思うだけ」

言い捨てるようにぶつけられていぐ。投げよつのないイライラを
自分を的にして済ませてるんだろう。じつからすればいい迷惑だ。

「あのは、君はそつやつて大口や愚痴をきかせてるだけじゃない
か。横から茶茶を入
れるのも大概にしてくれないか」

「はつ、何言つてんの。あんたが自分の契約だからつて勝手にや
つてるんじやない。

私のやり方じや気にくわないんでしょ」

わざとこつちの怒りの種を伸ばせせるような言い方だった。爆発
させてやりたい衝動

に駆りられるけれど、それじや向いつの思ひつけのよつな気がしたからおさえた。

「ああ、そつぞ。君のやり方はこれまで通りしてきたかもしけな
いが今回には合つ

てない」

「合つてるとか合つてないとか、そんなの決めるのは先方でしょ」

「そんなもの聞かなくとも分かる」

言い合いのよう今までなつたが、ここで天崎の方が引くよつて言葉を止めた。

「あつそう」

そう言い残し、さつさと先を歩いていく。なんだか向こうの方が大人なような気になつてムシャクシャは消えないままだつた。

それから3日、先方との案の練り直しに四苦八苦していた。クライアントと先方、双方

方にとってどうするのがベストになるのかを数えきれないぐらいに頭に働かせていく。

一応天崎ともミーティングをしたりしたが、基本的に彼女は自分の主張は出さずにサポート役に徹していた。それはありがたくはあつたけど、これまでの彼女の言動や社内ト

ップクラスの成績からすると不気味ともいえた。

その作業が佳境に入つてゐるときだつた。それはあまりに突然、終結された段階として突きつけられる。「別件を頼まれたから」と2～3時間外出していた天崎が帰社する

と、成枝のデスクまで書類を差し出してこう言つた。

「進めていた田代様との契約、結んできました」

耳に入つた瞬間、何を言つてゐるのか理解できなかつた。だつて、今まさに自分がその

契約の案を作つてゐるんだから。でまかせにしてはずいぶんタチの

悪いものだが、そう

ではないのは分かった。係長に報告をしているんだから、そんな[冗談]を3年目の人間が

するわけがない。

「じゃあ、一体どうこうことなんだ。全く理解は進まない。

「分かりました。よくやったわね」

書類を確認すると、成枝はそう天崎をねぎらった。話が終わり、向かいのデスクへと

何といふこともなく座る。いつに對して何の言葉もない。

「おー」

たまらず顔をかける。

「何」

「どうこうことだよ」

「どうこうことってどうこうこと」

白々しく返していく。

「ふざけるな。契約結んだってどうこうことだ」

「どうこうことよ」

「嘘つくな。そんなことがあるはずないだろ」

そう言いつけると、天崎は息をついて手元の書類を渡してきた。

それを受け取り、内

容に目をとおしていく。そこにあつたのは紛れもなく契約が結ばれたというものだった。

嘘だとthoughtいたが、それは現実逃避にしかなりそうにな。

「ちょっと来い」

余計に理解に苦しみ、そう雑に階下へ歩き出す。もう自分の想像の中では状況の枠を

組み立てるのは困難だと悟った。

営業部を後にし、誰もいない会議室の中へ入る。いつもの中の小休憩スペースですべての話で

はなさそうだからそうした。

「ねえ、許可もなく使ってもいいの」
部屋に入つてくるなり天崎は言つた。今にかぎつてはその語調に
より感情をたかぶら
せられる。

「もう一度聞く。これはどうしたことだ」

渡された書類を見せ、再び問つ。他に誰もいない分、やつしきより
も言葉は強くなつて
いた。

「だから言つてゐるじゃなし。やつしき」と

天崎からの返りは変わらない。

「そんなことを聞いてるんじゃない。ビツして君がこんなものを
持つてるんだ」

「契約をとつてきたからよ」

「いつ」

「わしき」

「どうやつて」

「そんなのわざわざ説明しないわよ。面倒くさい」

馬鹿にされたような気分でならない。天崎から言葉を返されるた
びにその思いは増長
していく。

「まあ、じつて言つなら……あなたが嫌がつてた私のや
り方で、つてとにかく
かしら」

その言葉は今手にしてゐるこの契約書類から読みとれた。契約は
先方の提示の2／3
割ほどを受け入れたものになつていて。当初の7割、その後に妥協
した5割よりもまた
下に押された結果だつた。

「どうして一人でやつた。勝手な行動もはなはだしいぞ」

「あなたがちんたらやつてるからじゃない。じつこうのはね、ス

ピードも大事なの。

慎重にやりやいいんじゃなく、時間が経つにつれて相手もこの交渉に新鮮味がなくなつてくつてこと。あんたみたいなとんとんしたペースじゃそれがなくなるのよ」

あんた、つてまたかよ。いい加減にしてくれ。

「じつくりやることも大切だ」

「それは言葉を良くしてゐるだけ。そのときそのときのタイミングつてもんもあるの。

流行の流れを読んでるうちにピークは下降してゐるし、回転寿司のネタを見極めてるうち

に鮮度は落ちてるし、家電の性能を見てるうちに新商品は並んでるの。それを無視した

ようなやり方がいつでもどこでも通用すると思つたら大間違いよ」

天崎の言葉に返答に詰まる。その言葉は確かに納得せざるをえないものではあるから。

怒りはとめどなく込み上げてくるにしても彼女は結果を出している。ただし、いくらなんでも強引が過ぎる。

「だからつて、あまりにも一方的すぎる」

「なら、あなたに言つたら許可したつてこの。絶対しないでしょ」

するわけないだろ、こんなの。

「僕がいなことはどうした」

「別件にまわつたことにしたわ。残念ながら大した話題にはならなかつたけど」

悔しくてたまらなかつた。出し抜かれたことも、あつさつと結果を出されたことも。

自分はこの契約になくともよかつた存在なんだと認識すると空しさえ生じてきた。天

崎のやつたことは許さないにしても、突きつけられた現実に心は強く傷つけられた。

「勝手な単独行動は悪かったわよ。でも、これであなたのやり方は見直すべきだつて分かったでしょ。悪いこと言わないから私のサポートに回つておいたら」

そう言い残し、天崎は部屋を後にしていった。一人になつた会議室の中の孤独感が今

の自分にぴったりだと思えてきた。

それからも同じ境遇は連続された。仕事を任されると、当初は2人で取り組むもの

契約の交渉案を練る段階になると必ず意見がぶつかる。せつやつて対立している間に天

崎は勝手に契約をとつてきてしまう。

僕はクリーンオフィスにも先方にもクライアントにも納得してもらえるところを探そ

うとするのに、天崎はクライアントを重視して先方のことはお構いなしにする。確かに、

依頼者の利益に重点を置くのは間違つていない。会社は依頼者からのお金で成り立つて

るわけだから。ただ、その交渉は先方を含めた三角の関係になつている。なら、そのも

う一つを無視するようなやり方は違うはずだ。そう信じ、連戦連敗にも引き下がること

はしなかつた。

でも、そのたびに折れそになるのも確かだつた。

「何でなんですか。僕の何がいけないっていうんですか」

無様な負けっぷりを続いているのに見かねたのか、土場と伝谷から飲みに誘われた。

そこでまた無様な潰れ方をし、田頃の「つづふんを撒き散らすよつてくだを巻いていく。

「お前が悪いわけじゃねえよ。ただ侑子ちゃんが出来すぎなんだよ」

土場からのフォローはありがたいけど、そんなふうには割りきれない。

「あいつは例外だから。特別。それでお前が気を落とすことないよ」

伝谷からの言葉は現実味があった。きっと自分と同じように天崎にやりたいようやられたんだろう。そういうえば、2人が言い合いをしてる場面を目撃したことがある。あのときも天崎の方が押ししきっていた印象だった。結果を残してる分、彼女の言葉には力がある。

「まずあの図々しさをなんとか出来ないんですかね。いつも何の相談もなく契約をとつてくるなんて常軌を逸してゐ。いくら僕が反対するからって言つても、普通は断りぐらにするだろ」

愚痴を言つているのは分かつてた。ただ、それでも吐かないとこの思いはどつにもしよつがなかつた。

「そんなら、断つてたら許可してたのかよ」

「…………してませんけど」

「じゃあ意味ねえだろ。そんな落ち込む前につよつとでも侑子ちゃんに近づけるよう頑張れ」

頑張れ、って言われても。そもそも根本的な部分が違うわけだから。天崎は元々の勝ち気な性格があつて、契約をとつてくる「」と自信をもつてプラスさせてより強力になつていて。自分が彼女と同じ境遇ならそつたかとなればそつたがつていいだろう。

多少は強気にもなつただろうが僕はあくまで僕のままだ。でも、このままでははずはない。コンビなんだからこんな状態ではいられない。どうにかする必要はある。

「僕、なんとかあいつに自分を認めさせたいです。上に立つことは難しくても、僕なりのやり方で無理でしょ？」

「まあ難しいだろうな。お前と侑子ちゃんじゃ差がありすぎる」そんなことは充分承知している。そつだとしても何か現状を覆せるようなどつておきはないだろうか。

「いや、弱味を握るとかならないんじやないか」

そのとき、伝谷がひらめいたように呟いた。

「そりや、そんなもんがあんなら悟空がシッポつかまれるみたいになるかもしんねえ

けど。でもよ、弱味を握るなんていやに幼稚なやつ口だらつよ。そんなもん小学校や中学校どまりだる」

土場はそうはねたけど、こいつはその言葉で想像を始めていた。

天崎の弱味、そんなのをそつただけあるのなら確かに弱点にはなつづる。ただ、土場の言つよつにそこにはつけこむのは姿としてみつともない。弱肉強食の対抗ならともかく仲間ではあるわけだ

から。

「第一、侑子ちゃんに弱味なんかあるのかねえ。何もかも完璧にさらっとこなしてそうだしな」

それはそうだ。弱味だとか弱点だとか、それ自体が仕事をしている彼女には見受けられない。

「俺、一つ思つてることがあるんですけど」

自分で半ば諦めで完結させようとしたところが、伝谷がちよつと待てとばかりに入つてきました。

「あいつ、もしかして女を使つてるんじゃないって」

瞬間では理解できない一言だった。捉え方の次第で深さの変わること葉。

「どうこうことだよ」

「色氣で相手おとしてるんじゃないか、つて思つて」

「はつ。何だよ、それ。変な接待してるとでも言つのがよ。馬鹿馬鹿しい。考えすぎ

だぞ、お前

「ただ、そうでもないとあの契約の早晩はおかしいんですよ。普通にやつてたらあれ

だけの短期間で契約を結ぶなんてまずないです。何かしら特別なことでも動いてないか

きつ

伝谷の言いたいことは分かる。天崎の契約をとつてくるスペースは並大抵のものじゃ

ない。ノンビ間の意見の食い違いが露呈されてから数日内には全てを完結させている。

それをおかしいと思つのは当然だ。だからといって、そこまで突拍子もない意見を

持つてくるのはさすがに彼女に失礼だ。それが彼女の実力なら、これは僻みでしかないわけだし。それに、意見の食い違いが生じる前から水面下で先方にモーションをかけてるのかもしね。

それから数日、新しく任された契約を行つていると案の定に天崎と言い合ひを続ける毎日になつていた。これまでと同じように、これからも同じような展開になるんだろうと思つとため息は自然にこぼれていいく。

ただ、今回にかぎつてはそうとはいかなかつた。デスクで案を考えるのに煮詰まり、外の空氣でも吸いに行こうとビルの中庭に出ると天崎の姿があつた。氣分転換のために来たのに彼女と鉢合わせたくなかつたので身を隠すと、興味本位でその会話の内容に耳を傾けていく。

驚いたのは彼女の様子だつた。簡単に言つと女の子らしかつた。いつも面と向かつて言葉をぶつけあつてる様は男も顔負けの迫力があり、強氣で自信に満ちた普段の様子からは想像がつきにくい。恋人とでも話してそつに思えたけれど、会話から相手は契約の交渉を進める先方のようだ。どうして先方とそんなフランクな話しがなんだと疑問はあつたが内容を聞きもらさないよつに注意する。どうやら、今夜食事をする約束をして

いる。

電話のやりとりが終わると、天崎に見つからないうちに静かに急いでその場を離れ

る。そして、どこということもなく歩きながら天崎の言葉を頭の中に繰り返していく。

ああやつて契約をとりつけるために動いていたんだなど確認できた密かな喜びとともに

先日の飲みの席での伝谷さんの言葉が思い返された。勝手すぎる單独行動、早すぎる契

約の成立。想像をリンクさせるのは難しかつたけれど正論で説明するのも難しく、どうにも煮えきらなかつた。

その日の夜、心のモヤモヤを解消できなかつた結果、僕は天崎と先方との食事の席の

店を訪れていた。密会と称していいかは分からぬが、少なくとも僕には秘められたもの

のではある。隠されると知りたくなるのは人間の性といえるけど、ここまで扉を開きかけてるんだからどうにかしたいと思つた。

天崎が交渉の席として用意したのは個室ダイニングの店だった。

照明も適度に薄暗く、耳に心地いいジャズのBGMが流れ、ゆつたりと落ち着ける空間でカッフルにはもつて

こいの雰囲気だ。一人で行くような店ではなかつたがここにきて引き下がれはない。

天崎が入店すると、その後を追つて店に入つて隣の部屋を指定させてもらつ。適当に

注文をすると個室の中を見渡していく。こんな店を用意するなんてどういう意図なんだ

ろうか。仕事の交渉を真剣にする場にはそぐわない。考えるほど歪

んだ形が浮かび、それを消していく。

20分弱で先方は来た。部屋の前を行き交つ様子を暖簾の下から確認し、隣の部屋からも会話は聞こえてくる。個室の方は筒抜けになつてるので会話は耳にすることが出来たが何を話しているかまでは分からなかつた。それでも聞き耳を立てて最大限の努力を試みる。

最初は仕事っぽい調子だつた。会話の内容は分からずとも天崎も相手もいつもの様子がうかがえる。おそらく、自分とは別の天崎が用意した案についての説明がされているんだろう。

変化があつたのは話が始まつてから30分が過ぎた頃だつた。だんだん小声になつていき、隣の部屋から聞こえてくるのは微かな物音ぐらいになつた。言葉もそれがそこに存在しているのが確かめられる程度のものでしかなくどんな会話がなされてるのかを想像することさえ不可能になる。それはこの店の持ち合わせている雰囲気に重ねることも出来るほどだ。明らかにおかしい。契約の交渉をする度合ではない。一体、向こうの部屋では何が行われてるんだ。

結局、その展開は最後まで続き、ただ耳をすませてやきもきするしかなかつた。

隣の部屋から「じじじ」と帰り支度の音がしてきたのでこちらも急いで支度を進める。

2人が部屋を後にする様子を暖簾の下から確認し、店を出た頃合を

見計らつて部屋を出

る。警戒しながら店を出ると2人はすでに遠田を歩いていたため、焦つてその後を追つていいく。

前を歩く歩調と同じ速度で気を張り詰めて歩を進ませていく。もちろん、良心は痛んでいる。僕は何をやつてているんだ、こんなところがバレたらタダじゃすまない、と何度も考えた。それでもその足は止まらない。好奇心もあつたかもしれない。緊張感の中で

起こる錯覚もあつたかもしれない。ただ、心の中で何か根拠のない自信があつた。良いものじやなく悪い方だ。それをこの田で見ないと、せつとこの先どうにもならない思い

に駆られていくに違いない。何である時に、と絶対に後悔するはづだ。そう勝手に近く自分に思い込ませていく

そして、その自信は確証となつて眼前に映し出される。夜の街を歩いていた2人は立ち並ぶホテルの中の一つへと入つていった。ホテル街に踏み入った時にはまさかと思つたが悪い胸騒ぎは的中してしまつた。当たらなくていい予感が現実になり、ただ愕然となる。頭の中は混乱を極めて正常に動いていない。何が起こつたのか、と田の前の事実を拒否しようとさえしている。

しばらくそんな思考の繰り返しが続いた。実際の時間はそんなではなかつたと思う。ホテル街で立ち尽くす男なんておかしい。目的が見えない。珍しいものという田で見ら

れるに決まってる。その視線に耐える気力はない。だから、長くはなかつただろう。ただ、それはとてつもなく膨大なものに感じられた。先の見えない、掴みようのないものだつた。

やがて、その場を離れていく。力のない意思の欠けた歩き方で。気力を奪われた分だけ傾いた猫背で前方へ進み、重力でのみ地を足につけていくような感覚だつた。頭に幾度も巡る思考に全てを向けよつとして、そんなポンコツなロボットみたいになつてしまつていた。

帰り道も、家に帰つてからもずっとそのことだけを考えていいく。終わりのない道を走つているような感じだつた。ああいつといふに入ったといふことはその先を予想するのあまりに簡単なことだ。どうして。本当に伝説さんの言つような理由なんだろうか。

天崎の仕事の早さの裏の真実といつことなんだろうか。いや、単にあの2人が普通な流れでそういう関係に発展したのかもしれない。でも、それにしてはおかしい。あの2人が知り合つてからじや時間が短すぎる。そんなに急速に近づいていつた形跡も全くない。

なにより仕事の話をした後に、といつのも変だ。それに、先方の担当者には妻子がいる。

なら、不倫か。いや、どうにしろ不倫だらう。待て、本気でないのならそつは言わないのか。ああ、もう頭がどうにかなりそうだ。

結果、正解に行き着くことは出来なかつた。当然だらう。この解

消できない思いに心

を疼かせたままでいないといけない。いつも、見ない方がよかつた。
見なければ後悔す

ると思つてたのは見ても見なくても後悔する現実だった。この先を考えるのは止めにし

て無理に寝に入つていぐ。確実な現実逃避でしかないと悟りながら。

その翌日と翌々日、仕事につまづく集中できなかつた。理由は向かいの席にいる天崎に他ならない。あの後に一体何があつたのか。それに思考回路は捉われていた。

田の前に彼女がいるとそれを思い浮かべてしまつし、彼女が外出すると自分に内緒の先方との打ち合わせなんだらつと思つてしまつ。一度だけ僕の案でのミーティングもしだが、こんなことは全て無視されて裏では勝手に契約を進めてるんだろうと心では思つていた。

そして、そのときは訪れる。外出から戻ってきた天崎は成枝のデスクへ書類を差し出す。来たか、と思った。

「進めていた政広様との契約、結んできました」

これまでなら急すぎる終結として突きつけられてきたその言葉に驚きはなかつた。理

解は可能だつた。ただ、分かっていたはずのその結果に心を苦しめられる。一昨日の夜

のあの出来事はそういうことなのかといつ予想が事実によつ近づいた。

「分かりました。よくやつたわね」

書類を確認すると、係長は天崎をねぎらつた。向かいのデスクへと座ると、土場からも声を掛けられる。何も知らない人たちの反応だ。前までは自分もそつち側だったのか

と思うとなにか騙されていたような感覚にさえなる。

それからも仕事には打ち込めなかつた。いや、気がおさまらないのは増していた。

視線を何度も天崎の方へ向けたが何の変化もない。その様に感情は沸々と込み上げてく

る。あんなことをしておいて、どうしてそんなひょうひょうとしていられるんだ。おか

しいだろ。あんなの反則に決まつてゐる。そういうくらでも溢れてくる思いを胸の内に留めるのに必死だつた。

「おいつ

その日の就業後、そわそわしながら天崎の終わりを待つて、帰るところを狙つて声を

掛けた。正直、どうするべきかは迷つた。仕事そつちのけでそのことを考えていたと言

つても過言じやない。いいんだ、どうせ俺の努力なんて天崎の裏接待に消されるだけなんだから。そう、僕はそれを解決しなければならない。このままじや、いつまで経つて

も同じ事の繰り返しにしかならない。こつちがどれだけ知恵を振り絞つても全てが泡となるだけだ。そんなんじゃいけない。きちんと企画で勝負をしないといけないし、何よ

り彼女に間違いを気づかせないとならない。

「何よ

「これから時間空けられるか」

「これから」

「ああ」

「どうして」

天崎の言葉の返答に怯む。

「どうしてもだ」

付け焼き刃のように返すと天崎は息をつく。

「何。ここで言って」

「こんなところで言えるわけないだろ。

「ここじゃダメなんだ。どこか別のところがいい」

「会社は」

「会社もダメだ」

誰かに聞かれでもしたらどうすんだ。

いつちの執着に折れたように天崎は嫌々な表情を見せる。

「分かったわよ。どこ行くの」

全く乗り気でない天崎を連れ、歩き出す。実のところ、まだ心中は決まっていない。

どこまで踏み込んでいいのかに悩んでいた。きっとこのまま僕がスルーすれば何事にも

ならず終わるのだろう。ただ、このままいいわけはない。仕事を受けるたびに天崎

との意見は食い違い、自分が案を考えてるうちに天崎が契約を裏でとつてくる。それで

だけじゃ、天崎の評価は上がつて僕の評価は下がるだけだ。仕事はもつと正當でないと

いけない。コンビを組んでる者同士ならなおさらだ。それに、あんなことで契約を成立

させめるなんて政治家に賄賂を贈つてるようなものだ。誰かがちゃんと

と言つてやらないと

彼女のためにもならない。それは充分に分かつてているが、事が事だ

けにどう進めていいのかに迷いが解けない。

そんな状態のままで目的地へと到着した。連れてきたのは一昨日の夜に来た個室ダイニングの店だった。当然、天崎には疑問符がともる。自分の使っている店をこの男がどうして知ってるんだ、と疑う。今、彼女の頭の中では様々な憶測が飛んでいることだろう。もしかしたら、と真相に感づいているかもしれない。その方がこちらとしてはありがたい。急な告白よりも伏線が張られてる方が衝撃は和らぐだろうから。

店に入り、部屋へ通されると一昨日と同じように適度に薄暗い照明や心地いいジャズのBGMに迎えられる。メニューはビールだけを頼み、天崎も「同じでいい」と続けた。

店員がいなくなると、部屋にはピンと張った空気が流れしていく。力ツブルなら穢やかにゆつたりとなれる空間だがここにはない。2人ともこれから起ころうであろう展開を探り合っている。天崎は僕の出方をうががうように視線だけを向けている。怯みそういう心にグッと力を入れ、「行け」と自分自身の背中を押した。

「一昨日の夜、ここで君を見た」どうすべきなのか、結論は固まらないまま口を開いていた。どうせ、このまま悩んでいても迷い続けるに違いない。一昨日のよしおりに転んでも後悔が伴うのかもしれない。それなら、身を守るよりも当たつて砕けよう。

「君は政広さんとここに来ていた」

言葉の間に間を置かせていく。天崎の反応を見るために。彼女はこちらへ向けている

視線をそらさなかつた。心の中は揺れていると思つ。ただそれを表には出さない。充分

に間を取ると、「そういうことか」と小声で呟いた。

「付けてきたわけね、私を」

天崎の言葉に何も返答はしない。それについては何の弁解の余地もない。

「人のこと付けて秘密探らうなんて最低ね」

強く投げられたその言葉は僕の心に傷をつけた。確かに僕は最低なことをした。他人

の隠しているものを無理やり見ようなんて馬鹿なことだと思つ。半分はそんな卑しい思

いがあった。でも、もう半分は天崎が間違いを犯してしまってるんじゃないかつていう

思いだつた。もしも予想が当たつていたとしたら正しい道に戻してやらないといけない

んじやないか、つて。それは簡単なことじやないけどもそのままにしておくよりは絶対

にいいはずだ。その点については間違つてない、と刻みつける。

「君の言う通り、僕のやつたことは最低だ。それに關してはいく

らでも謝る」

「ただ悪い予感があつたんだ。君が契約をとつてくれるのはいくらなんでも早すぎる。

何があるんじやないか、そこに何か良からぬことがあるんじやないか、そう思つた。そして・・・・・それは現実だつた」

自分が一昨日日にしたのはこの店で見たものだけではなくその先も、という意味を込めて発した。踏み込んでいいラインを超えているのは分かつてゐる。け

ど、それでも超えた

いとならないラインもあるはずだ。

「どうしてだ。何で君がそこまでする必要がある」

問い合わせると天崎は返答に窮する。視線は外し、今ビニまでを口にすればいいのかに

頭を動かしている。全てを投げるのか、程々に包ませながらなのか、ダンマリを決めるのか。

「それが仕事をとつてくる最も効率のいい方法だから」

覚悟を決めたように表情を澄まして天崎は言った。

「効率」

「ええ」

悪びれた様子が一切見えない。僕に対してもそれをする必要はないんだろうけど、自分

のやつていることが分かつてないのか。

「たつたそれだけで」

「悪いの。自分の武器を使つただけじゃない」

「武器」

「そうよ。私は女だし若い。それを有効に使つただけ。あんただつてあるでしょ。そ

の暑苦しいぐらいの感情で相手の懷に入るとか。それと同じ。他の人より自分の長けて

るものを利用するなんて当然のこと」

「言つとくけど、相手も合意の上だから何しようともダヨ。2人

の間で成立してるん

だからあなたに入り込む場所はないの」

あたかも自分は何も悪くないと言いたげだった。腹が立つた。自分

のしている事の重

大きさを理解していない。

「政広さんには家族があるだろ

「知ってるわよ。バレなきゃいいんでしょ」

「君だって、万が一こんなことが会社に知れたら」

「そうね、100%クビでしょうね。でも、大丈夫。そうならな

いように手は打つて

あるから。相手がもし漏らすようなことをしたら痛い痛いペナルティを科す約束をしてるの。少なくとも、今ある家庭や役職は崩落すること間違いないしね。そんなことまでして言うはずないわ」

天崎が裏の裏で何をしたのかは分からないが、この余裕からすれば相当な自信がある

んだろう。

「まあ、あなたが言わなければなんてことないわけよ」

「違う、そんなの。君は間違ってる。こんなことしちゃいけない」

「そうだ。人としてこんなのがいけない」

「お説教なら勘弁だけど。あんた、いちいち暑苦しいのよね。そういうの私苦手なん

だけど」

「苦手とか、そういう問題じゃない。そもそも、それの何が悪い」

「別に、熱血なのは勝手だから否定しないけど。でも、熱いだけで人の心なんか動かせないの。100の力で失敗する人もいれば、50の力で成功する人もいるの。だつた

ら、どつちを選ぶのが効率がいいと思う。明らかに後者でしょ。あなたは前者でもいい

とか言いそなうけど、だつたら残りの50の力を別のところに注い

だ方がより良くなる

じゃない。そう思わない

それはそれで合っていることだろうが、天崎のやっていることはそこに嵌めてはいけ

ない。もっと根本的な問題だ。なのに、彼女はそれを普通のことのようにしている。

「あんたも私のこと付けたわけでしょ。それだって充分やつちやいけないことじやない。それを開き直つたようにじやつちやつても、自分に都合のいいよう

にしないでよ」

捨て台詞のように言い、天崎はその場を去つていった。誰もいなくなつた部屋で深いため息をつく。自分の無力さが嫌になつた。

それから先も天崎は自分の仕事のやり方を変えなかつた。本当にそうなのかを確認したわけじゃなかつたけど、契約を結んでくる早さに変わりがないのでそういうことなんだろう。

同じように自分も仕事のやり方を変えなかつた。彼女に何と言わようか、どちらがどれだけ頑張ろうとも彼女が先を越してくるのが分かつていいよつて変えなかつた。変な意地もあつただろうけど、これで諦めてしまつのは違うと思つた。天崎もそんな僕のやり方に付き合つていた。多分、嫌々だらう。通りはしない僕の案についてのミーティングも行い、意見も交わし合つた。お互いにお互いの芯を知つてくせに表の部分でのみ接していた。

そんな繰り返しを続けていくうちにだんだん心は詰まつていつた。こんな事実を知つていながら何もしてやれない自分に苛立ちが募つていつた。天崎に

は隠していたが、本

音はどうにかしてやりたいと思っていた。自分自身もこのままではいけない。意地を張

るのはいいが、このままを続けていても契約をとつてこれない。ほぼ全てを彼女に持つ

てかることになる。しかも、それは裏側で交渉が行われている。こんなことが続いてちゃいけない。

そう自分を鼓舞するよつにし、再びラインを超える覚悟を決めた。どうせもう一度は超えたんだからなんて自棄じやなかつたけど、多少の無理があつと現状を打破する必要がある。

天崎の裏側を突きとめる作戦を練るのは難しいものじやなかつた。前回の傾向から対

策を立てればいいだけだ。僕と天崎の案の食い違いが生じる頃合になると、彼女の帰社のタイミングを見て後を追つていぐ。そうすれば、近いうちに交渉の場所に出くわすはずだ。

そして、それは行動を始めた2日目に訪れた。帰社後に天崎を追つていくと、前回とは違う個室ダイニングの店へと入つていった。ここだと思い、店には入らずに外で張ることにする。前回からすると店内にいても会話を聞き取ることは出来ないだろうし、そこでの展開は想像がつく。大事なのはその後、それを分かっている。15分後に交渉中の先方が姿を現し、店内へ入つていぐ。その1時間後に2人は店から出てきた。後ろを付けていくと、長くせずに2人はシティホテル

へと消えていった。

チェックインを遠目から確認し、ホテルへと入る。エレベーターの降車階数で階を見き

わめると、ホテルの外に出て明かりの点灯した部屋を2人がとつた部屋と定めた。まる

でストーカー並の執拗さに感じたが、これが僕と天崎にとつて正しいんだと今一度刻み

つける。

深呼吸をする。決意をブレないものとする。再びシティホテルへと入ると、せつき確認した部屋へと向かう。

部屋の前へと着く。今この中でどんなことが行われてるのかと思うと高揚していく。

興奮というよりこれから自分のすべき行動へ気を高めていく感覚だつた。

息をつき、部屋の扉をノックした。鼓動は早くなり、もうじうこでもなれという思いながら正直なところだつた。しばらくして、扉がゆっくりと開いてくる。その隙間から

顔をのぞかせたのは天崎だつた。当然、驚きの表情になる。

「何してんのよ」

すでに薄着になつていていたせいか困惑に近い状態になつていて、そんなことはお構いなし

しに扉を開け、「ちょっと」という制止も気にとめずに中へ入つていぐ。奥まで踏み込むとそこは異質な雰囲気が漂つていた。ベッドの上には天崎の上着が無造作に置かれて

あり、先方はその側に座つたままじらうを見ている。当然、反応は天崎と同じだ。

「申し訳ありません、ウチの天崎がこのよつなマネをいたしました

て」

「深く頭を下げ、謝罪の言葉を掛ける。誠意を込めて謝る。辺り着いたのはあまりにも古典的なものだった。もちろん、これでどうにかなるわけがないだろ。一応2人が同意の上でここに来ているのなら、僕のしていることは邪魔でしかない。契約はこじれ、天崎からは罵声を浴びせられるだろ。ただ、今の僕にはこれしかないんだ。進まなければならぬんだ。

「ちょっと、この女は何なの」

先方から返ってきたのは天崎に対しての攻撃的な言葉だった。天崎の誘いに怒りがあるのか開き直りなのかは分からぬ。言葉遣いの異変には気づかなかつた。それだけのゆとりはなかつた。

「本当に申し訳ありません。謝つてどうにかなることじやないのは分かつてますが、なにとぞお許しください」

謝罪を続ける。許す許さないの次元じやないかもしけないが、とにかく今はこれしか出来ない。込められるだけのものを込め、頭を下げる」としか。

「じゃあ、代わりに君だ」

先方からの言葉の異変に気づいたときにはもう遅かつた。顔を上げて目が合つと、急に体じとベッドに押し倒される。訳が分からぬままいると、体の上に乗つかられて

事態の深さに思考が届いた。これつてものすごくまずいんじゃないか、そう悟った時に

はすでに体が反射的に動いていた。迫ってきた先方の体を掴み、ベ

ツドの下にまで投げ飛ばしていた。

一瞬静まった部屋の中で何が起ったのかを理解しようと頭を働かせていると、手を

掴まれてグイと引っ張られた。振り向くとそれは天崎だった。

「行くわよ」

そう言い、強引に僕を連れて行こうとする。まだ理解がしきれていないせいで、ここを離れていいのかどうかを判断できていない。この場を去るということは逃げるということであり、先方との契約も無くなるということにもなる。それでいいんだろうか。ただ、今は冷静な判断が出来ない自分の曖昧な考えよりも彼女の判断に委ねた方がとりあえずはいいのかもしれない。

天崎に手を引かれながらシティホテルを脱出し、しばらく走り続けた。ある程度のところまで来ると止まり、息の乱れを整える。その間に自分がしたことのあれこれを思い返していく。

「しまったあ」

思わず声が出てしまった。目をつむり、後方へのけぞる。本当は天崎の馬鹿な行為を止めさせて、あらためて契約の交渉を申し込むつもりだった。なのに、自分が投げ飛ばしてしまったなんて。完璧に契約は破棄だ。それどころか、あんな目にあわせてしまったのだからタダじゃすまないかもしない。クリーンオフィスへ苦情が来たりしたらどうしよう。

「ねえ、あんた何が勘違いしてない」

天崎の言葉に現実に戻される。勘違い。僕の考えに勘違いがあるのか。それは良い方

のものが、悪い方のものか。

「勘違いって何が」

「あの人、ゲイよ」

「はつ」

一体、何を言つてるんだ。言葉が衝撃的すぎて理解に困惑つた。現時点での自分の許容できる程度を超えていた。

「どういうことだ」

「だから、そういうことよ。私が迫つても何も興味を示さなかつたわ。そんなのおかしいと思つて探りを入れたら案の『定』

「そんな・・・・・話が飛び抜けて分からない」

「簡単じやない。あんた、あの人には迫られたでしょ。私じゃなくてあんたが。それで

充分じやない」

その説明でようやく事態を把握できた。崩れるようになんにその場に座り込む。まさか、そ

んなどんでもない展開になるなんて。

「つていうか、笑えるわよね。あんた、あんなオヤジにヤラれそうになつたのよ」

小さく笑う天崎に怒りを覚える。君のためにわざわざあんな危険な賭けをしたつていうのに。

「もう最悪だ。これで契約の不成立は間違いないし、ヘタしたら先方から抗議も来るかもしない」

「いいのよ、どうせ交渉成立しなかったんだし。それに抗議もな

いわよ。内容が内容

だし。こつちも向こうがゲイだつてこと分かつてんだから大したことは出来やしないつてば」

慰めてくれてるんだらうがありがたみは薄かつた。それよりも精神的なショックが大きい。

「しつかし、まさかゲイだとはねえ。こういう展開もあるのね。計算外だつたわ」

天崎の態度は実にあつけらかんとしたものだつた。反省の色はまるでない。

「君はいつもこんなことしてるのか」

「ええ、そうよ。それが。悪いの」

開き直りもここまでくれば褒めてやりたい。実際に褒めるほど余裕はないけれど。

「悪いとかじやなく、もつと自分を大事にしりよ」

「気にしないで。エッチは結構好きだから」

「そういうことじやないだろお」

深い息をつく。彼女には何を言おうと無駄骨なのか。良くも悪くも自分のスタイルを

貫いている。こつちがやつたこともおそらく彼女にとつては何ということもない小さな

ものなんだろう。

「でも、ありがとうね」

「えつ」

強気な言葉の中での突然な感謝の言葉に驚いた。

「一応、助けよつとしてくれたわけでしょ」

「まあ・・・・・それは」

言い方自体はぶつきらほつたけれど、それは彼女らしいともいえた。感謝を求め

てやつたわけじゃなかつたから変な感覚も伴つ。

天崎は座り込む僕に手を差し伸べてきた。その手を取り、グッと
引っ張られて起き上

がる。接近した間に妙な空気が流れしていく。

「まひ、じつちからしたら単なる空回りにしか見えなかつたけど
ね」

「君はなあ」

「何でそこ今までやめひつとあるのかは分かんないけど真つすぐもや
こまで行つたら病氣

ね」

せつかくの和んだ空氣を打ち消される。この減らず口はなんとか
ならないとかと息を
ついていると唇に合わせる感触があつた。キスされていた。直りか
けていた頭の中身が
またこんがらがる。

「一応のお礼」

「はつ」

何だ、それ。お礼がキスつてどんだけだよ。

「さつ、次はちゃんと仕留めて今日のミスを帳消しにしないと
キスのことは流れ去つたように天崎はもう次の話をしていた。

「おいつ、言つとくけどあんなやり方は一度とするなよ」

「ああ、どうでしようねえ」

「どうでしようじやない。あんなことはやめひ」

「別にいいでしょ。私がどうしようが。私は私のやり方でやるか
らあんたはあんたの

やり方でせいぜい頑張りなさいよ。まあ、報われない努力でしう
けど」

笑みをこぼしながら囁く様に怒りが込み上げてくる。あれだけし
てもまだ分からぬ
のか。

「つくづく分かったよ。君とは本当に会わない」
感情を出し、強く言い捨てる。

「いっちゃんのセリフよ、バーカ」

同じように天崎も言い捨て、さあさと歩いていってしまう。その後ろ姿を見ながら、かつてないほどの気に満ちていく。これまで書いて通用しないなら勝手にすればいい。

僕は僕のやり方で必ず勝つてみせる。
もう、成るようになれる。

本に換算すると、43ページになる短篇です。
反対な性格の男女がぶつかり合つた話をストーリーにしてみた
しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2193s/>

いやよいやよもすきのうち

2011年4月5日22時48分発行